

栗笠の獅子舞



栗笠の獅子舞

表紙の説明

表紙の栗笠村絵図は、専了寺に所蔵されていたもので文化十二年九月に書かれたものです。文化十二年といえは昭和五十七年からは一六七年前にあたります。この当時は、世の中がぜいたくに流れ、芸事が非常に流行した時代でした。当時の栗笠村は、湊町として繁栄を誇った昔の姿はうすれてきていたが、佐藤家一族が船問屋・庄屋として栗笠を支配していた時代であって、福地神社の祭礼に献灯される大提灯や切子灯籠はこの時代の名残であり、獅子舞も盛大に奉納されたものと考えられます。

この絵図によると主な道路は今も昔のまゝです。居屋敷も昔のまゝの所が多く、今自分の住んでいる屋敷には誰が住んでいたのか、自分の先祖はどこに住んでいたのでしょうか、興専寺が村の西端にあったことには驚く人も多いことでしょう。

この絵図をながめていると、われわれの先祖がありし昔をいろいろと語りかけてくれるようであり、遠い先祖の血がそのまゝ、自分のからだに流れていることが実感されます。

● まえがき

栗笠に伝承されている獅子舞は、その起原も古く、又その種目も四十八種目にも及んでいて県下でも他にみられない民俗芸能であり昭和四十五年八月十一日に岐阜県重要無形文化財に指定されました。

栗笠のような湊町の住民は、敬神の念が強く、気風が明るく芸能を好むものですが、長年にわたってこの湊町を支配してきた豪族佐藤氏が五穀豊穡・村内繁栄祈願ならびに村民の娯楽のために獅子舞を奨励し、庇護したためながく伝承されてきました。

明治の時代になってからも村に在住する青年は獅子連中に入ることを義務とし、名誉と思い、寝食を忘れて古老・先輩からきびしく獅子舞・笛・太鼓の伝授を受けたものでした。

しかし、時代の変遷につれて青年が獅子芸の習熟のため二、三か月にわたる長期の練習を続けることは不可能となってきたため、現在では栗笠獅子舞保存会の方々は児童・生徒を対象としてその維持保存に尽力して下さいますが、学習時間との関連等において種々の困難が山積している状態であります。

この冊子は、栗笠の獅子舞についてのご理解を頂くために刊行したもので、先ず獅子舞をはぐくみ育てて来た栗笠はどんな歴史をもつ村であったかを述べ、次に獅子舞の芸についての解説をいたしました。

皆様がこの冊子によって栗笠の獅子舞についてより深いご理解を頂き、鑑賞眼を高めて頂くと共に獅子舞発展のためにご支援を賜りたくお願い申し上げます。

昭和五十七年三月

第一章 栗 笠 村

1、栗笠村の沿革	1
2、栗笠村の繁栄	2
3、栗笠湊・九里半街道	4
4、運河の掘鑿計画	5
5、佐藤家	6
6、福地神社	7
7、市神社	8
8、須賀神社	8
9、福地神社の祭礼	8

第二章 栗笠の獅子舞

1、栗笠の獅子舞の起原	14
2、獅子舞の奉納	14
3、栗笠の獅子舞の基本となる舞	16
4、栗笠の獅子舞の用語	19
5、栗笠の獅子舞の種目	20
6、栗笠の獅子舞四十八種目の説明	21
7、栗笠の獅子舞の主な諸道具	50
8、栗笠の獅子舞連中規約	53
9、栗笠の獅子舞保存会規約	55
付録 1、昭和二十二年栗笠の獅子舞連中	57
2、大提灯の張替作業	57

第一章 栗笠村

栗笠の村は、いつごろから開け、そしてどのように発展して来たのであろうか。又、栗笠の獅子舞は、どうして生い立ち、伝承されて来たか、その歴史のあとをたどってみよう。

1、栗笠村の沿革

「倭名類聚鈔」「和名抄」ともいう）は、西暦九三〇年の頃にできた書物であるが、この本の中に美濃国八郷の中、富上郷という郷が載っている。この富上郷について「大日本史」では、「富上の上は土のまちがい富土がほんとうであろう。今多芸郡の東の方、栗笠村に福地神社があるが、それがその名のなごりであろう。」とのべている。富||福、土||地で富土が福地に変わったのであろうというのである。千五十年も前の本に載っているのであるから栗笠もずいぶん古くから開けていたものである。宝暦六年（西暦一七五六）にできた「濃陽志略」という本にも「この地に福地神社があるから富上の郷はこの栗笠のことであろう」と述べている。

しかし、古い時代の栗笠の集落は現在のところにあつたのではなく、五百メートル程南の方の字北村という微高地

にあつたもので、そのあとは今畑地になっており、福地神社もその付近にあつた。今そのあとに福地神社址という標柱が建っている。又、畑地からは弥生土器や須恵器の破片が出土するので栗笠の先祖は千数百年程も前から住みついていたものと考えられる。

文明十七年（一四八五）といえば、戦国時代のはじまりかいた時であるが、この年の文書に多芸郡妃婦寝郷味足村と記し、延徳二年（一四九〇）の文書には北村之郷味足村、又永禄六年（一五六三）の文書には濃州當耆郡姫船郷栗笠、慶長元年（一五九六）の文書には北村郷栗笠村の北村天神の御遷宮をしたと記され、享保四年（一七一九）の文書には北村之郷と記されている。（栗笠専了寺所藏文書に拠る）栗笠団地のすぐ東に貴船神社址の標柱が立っている。

北村に住んでいた人たちはどういうわけで現在のところへ移ったのであろうか。五・六百年も前のことであろうが、牧田川筋の堤防が次第に築かれるようになったので、これまでたびたび水害になやんでいた村人たちは、堤防ぞいに移住して少しでも水害からのがれようとしたものと考えられる。しかも、川沿いの地は交通も便利で生活がしやすいからである。この移住が行われた時代は明確にはわからないが、戦国時代の末期には栗笠の村名があらわれ、湊町として次第に発達して来た。

江戸時代になると、栗笠は元和元年（一六一五）に下笠・船附・大野・上之郷・烏江などとともに幕府の直轄地となり、下笠にいた幕府の代官石原清左衛門の管轄下になったが元和五年尾張領となった。（上之郷は幕領のまゝ残った。）後、尾張藩の付家老今尾城主竹腰氏の領地となって明治維新まで続き、明治四年七月廃藩置県の時今尾県となり、同年十一月岐阜県の所轄となった。

栗笠の村高（その村の年貢などの基準になる米の収穫高）は、慶長一八年（一六一三）の「美濃一國郷牒」では五八四石余。正保二年（一六四五）の「美濃國郷帳」では六〇四石余ほかに新開地六八石となっており、沼新田や五島新田が開発されたことがわかる。明治維新当時では九六一石四斗七升七合、総反別八五町拾四歩である。明治五年（一八七二）八六五石余、新田高九石余、堤外金草川沿い新田一二石である。戸数・人口は元禄一六年（一七〇三）一一五戸・五六七人、寛政一〇年（一七九八）一五六戸・八二〇人、明治五年（一八七二）一七二戸・七八一人、明治十四年一九三戸・八四四人であった。

明治三〇年（一八九七）笠郷村の大字、昭和二九年（一九五四）養老町栗笠となる。昭和四七年から字仲田に住宅団地が造成され現在五〇戸・一九三人で栗笠総戸数は二〇三戸総人口九三二人である。

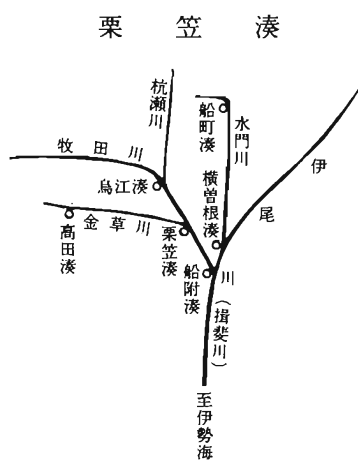
2、栗笠村の繁栄

栗笠村は、室町時代の末期から明治維新前まで烏江・船附と共にいわゆる濃州三湊として栄えたところであり、又、享保一七年（一七三二）から六斎市（ろくさいいち）といって毎月、日を定めて市が六回開かれるようになったが、この市はいつまで続いたかはわからないが、当時栗笠は湊町としてだけではなく市場としても栄え当地方の舟運・陸上交通・物資交流・経済などの中心地として重要な地点であった。村の東の入口に市の神様である大市姫神（おおいちひめのかみ）をまつる市神社が鎮座する。

「濃州徇行記」（のうしゅうじゆんぎょうき）は寛政年間（一七八九～一八〇〇）にできた本であるが、この本には栗笠村の繁栄ぶりを次のように記している。

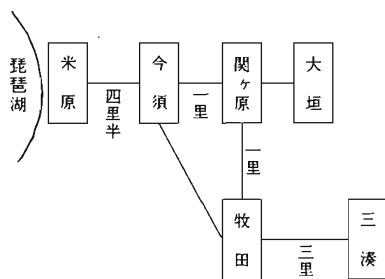
一、此村は牧田川の堤の南傍に民戸建ならび牧田街道筋にて町並（まちなみ）なり、湊（みなと）ゆえ農商を兼ねたるもの多し、町長は東西三町（約三二七m）ほどあり、町の名はなきよし、酒屋・味噌屋・小物屋・紺屋・菓子屋其外小商をする家余程みえたり、其内佐藤与三郎・佐藤文四郎富戸にて家づくりもよし、湊問屋を佐藤次郎左衛門と云、御役所（ごふくせう）（平田船、海でも舟運のできる大きな船で七〇石一〇〇石積）六艘と鵜飼船（鵜飼をする船ではなく

荷物船で二〇（五〇石積）四艘、御役船の外舳二艘、四（乗一艘、藻取船八艘ありて此は船かせぎをする家八戸ほどある由、岐阜より商い上せ荷物多くこゝの湊へ着岸し、茶荷物も来るとなり、みるところ村にぎわしく豊饒の地なり、其外頭百姓を佐藤丈三郎・佐藤安三郎、庄屋宇内と云、又前に記す文四郎と与三郎なり、○此村田面は東南の方船附村の間へ長く出張り地高くして水深溜りなく良地也、田面の字を仲田・村前・沼・猿橋・蓮池、内草場など云えり、筋かいに烏江村・江月村悪水落江筋あり。（昭和三五年度の土地改良工事でなくなった。）



一、早戸大明神境内一反二畝（約一二〇〇㎡）村除也、此社は村内入口左の方にあり、宮づくりよし、福地大明神境内一反五畝七歩（約一五〇〇㎡）（その址に標柱が建っている）、白山権現社一畝十歩（約一三三㎡）（その址に標柱が建っている）。共に村除也、村の南にあり。（この記述によつて二百年程前には今の福地神社の地には早戸神社が鎮座していて、後、福地神社が北村から、白山神社が村前から移ってきたことがわかる。）興専寺境内（現在田中忠男氏宅前付近一帯）九畝、専了寺境内一反四畝二十五歩共に村除也。又、「新撰美濃志」という百四十年程前の書の「白石村」の

九里半街道



ところには、

「養老酒は、近き栗笠村の竹光堂という家にて製造^{つくろ}て諸方にうる。瀧津瀬と名づけて名産とす。其精厚甘味他に比するものなし、よりて価も亦貴^{たか}し、高田の町にて作れるをも亦養老酒という。」

と記されている。

文化七年（二八一〇）に文人たちが佐藤与三郎邸に集つて

栗笠八景を定め、漢詩や和歌をつくつてゐる。

栗笠八景

栗笠湊船

養老山花

一本松月

牧田川蚩

多芸野雪

中道旅人

鎌倉堤雨

明神夜灯

3、栗笠湊・九里半街道

中世の末期から牧田川沿いの烏江・栗笠・船附は湊町として次第に発達して来て江戸時代には「濃州三湊」といわれ、我が国の経済上・交通上・運輸上重要なところとなつて来た。

我が国の本州の地形は中央を背骨のように高い山地が連なつていて太平洋方面と日本海方面とに分けてしまつてゐる。唯、関ヶ原のところは山脈の切れ目になつていて昔から

中山道や北国街道などによって太平洋方面と日本海方面・関西地方を結ぶ最も便利で最も短い距離になつており、現在でも東海道本線・東海道新幹線・名神高速道路などが通じている重要な地点である。

三湊は、舟運で桑名や名古屋、さらに遠く江戸とも結ばれており、また陸運では三湊を起点とし、栗笠西の金草川堤を岩道・西岩道・ロヶ島・高田・五日市・牧田・関ヶ原を経て琵琶湖畔の朝妻湊^{あさづま}（米原）にいたる九里半街道（九里半廻し）によつて関ヶ原で中山道に合し、北国街道と結ばれてゐたため三湊は琵琶湖と伊勢湾を結ぶ重要な中継点として発展し、東西間の内陸輸送の最短距離コースにあたり、最短・最速・最低賃金を求めて関東・関西の諸荷物が行き合つた。

上り荷物（関西・北陸へ行く荷物）の主なものとは木曾材・茶・塩・陶器などで下り荷物の主なものは油・木炭・棉・米・石灰などであつた。

烏江湊の船問屋は吹原家、栗笠湊は佐藤家、船附湊は安田家が勤めていて非常に繁栄を誇つてゐたが江戸時代の中頃から湊は次第に衰えてゐた。その主な原因としては、

① 大型船の建造が盛んになつたため、大阪・江戸間の海上輸送が便利になり内陸輸送が減つた。

② 牧田川に土砂が堆積して次第に川が浅くなり艀など大

きな船が通れなくなったため上り船は途中で大きい船から小さい船に荷を積みかえ、下り船ははじめ小さい船に荷を積み下り、途中で大きい船に積みかえねばならぬような不便が多くなり、したがって運賃も高くなった。

- ③ 大垣に船町湊が発展して来たため、荷物は便利な船町湊へ行くのが次第に多くなった。（尾張領の荷物は三湊へ廻し、他領の船町湊へは廻さないように荷物問屋に命令を出してほしいと何度も三湊から尾張藩へ嘆願している。）

- ④ 明治維新の結果、領主尾張藩の庇護がなくなった。などが考えられる。

明治維新で湊としての機能は亡びたが、昭和の初期までは中鵜飼船が二、三艘位は碇泊しており、堤上には倉庫が建並び、太神宮の灯明にはあかりがあげられ湊としてのおもかげが残っていたが、昭和二五年（一九五〇）牧田川と杭瀬川の分流工事が行われてからはそのおもかげもなくなった。

しかし、今でも往還の町並みは間口が狭く奥行きが深く、農村集落には見られない河港町的な雰囲気を残している。

今、市神社の境内に前に述べた栗笠湊の堤にあった皇太神宮の灯明が移されているが天保八年（一八三七）の建立である。昔八軒あった船頭さんの子孫で現存七軒の家から

奉獻された灯籠七張が毎年例祭の日にともされる。湊町にふさわしいうるわしい行事である。



市神社 灯明及び七つの灯籠

4、運河の掘鑿計画

牧田川と琵琶湖とを結ぶ運河をつくることができたならば、運輸上・経済上・軍事上などに莫大な利益がもたらさ

れるので、江戸時代の初めに彦根藩によって牧田川と米原の近くの天の川を結ぶ運河を計画したことがあったが種々の支障のため成就しなかった。

幕末にも軍事上の必要から再計画されたが明治維新となつてうやむやとなつた。

更に太平洋戦争後にも計画され騒がれたこともあったがこの度も成就しなかった。

5、佐藤家

栗笠湊の船問屋として三百余年間栄えた佐藤家は藤原不比等の後裔で家紋は源氏車、美濃国上有知（現、美濃市）の城主であった。

佐藤将監親義は志津山（南濃町志津）を居城としていたが永禄七年（一五六四）織田信長の先陣尾張国蟹江城主瀧川一益の為に攻略され、縁を求めて大塚城主（養老町泉町）丸毛兵庫頭に寄食していたが後、栗笠に移住した。天正一四年（一五八六）八月晦日卒した。法名覚林院殿雪庵宗関大居士、大塚村の妙徳院に葬った。志津の善教寺に墓碑がある。

親成は将監の子である。五郎右衛門と称した。元亀元年（一五七〇）織田信長が越前の朝倉義景を征伐した時、浅井長政に後を絶たれたために急遽引きあげたことがあったが、

その時徳川家康は五僧・保月の間道を経て時・多良を通して大塚村妙徳院に入り、さらに栗笠に来て佐藤五郎右衛門の家に宿った。その時松風という茶磨と飯籠を賜った。五郎右衛門は高田湊の西脇三郎左衛門と力をあわせて夜中に船を出し家康を太田村（南濃町）まで無事送った。慶長一〇年（一六〇五）卒。妙徳院に葬った。

栗笠湊の佐藤五郎右衛門と高田湊の西脇三郎左衛門は、慶長一五年高須城主徳永寿昌から湊の開発に功があったというので、特に持船二艘を持つことを許され、そのうち一艘は番船の取扱いを受けず随時船積みをしてよいという特権を与えられた。

親則は親成の子であるが五郎右衛門を襲名した。高田湊の西脇三郎左衛門は故あって罪により断絶したため西脇家の船株は佐藤家に受継ぐことになった。

親重は親則の弟で三四郎と称した。親則の死後、後継者の孫左衛門はまだ幼少であったので三四郎親重が問屋を継ぐこととなった。その後、孫左衛門が成人してから問屋株はもとにもどされることなく親重の子孫が相続することとなった。明暦三年（一六五七）卒。大塚村の莊福寺に葬る。

佐藤家は莊福寺の大壇那として代々の墓が多数現存する。莊福寺は鎌倉時代の初めに創建された名刹である。昭和八年牧田川改修工事の時高田の現在地へ移転した。

佐藤家は次第に繁栄して多くの分家があったがいづれも頭百姓や庄屋をつとめていた。文化一二年（一八一五）の村絵図（専了寺所蔵）によれば、材木屋佐藤文四郎、佐藤万三郎、佐藤宇内、酒屋丈右衛門、佐藤与三郎、紺屋佐藤三郎次、問屋次郎左衛門等佐藤一族がいづれも大きな構をかまえていてその繁栄のさまがうかがわれる。佐藤一族は皆苗字帯刀を許され、本家の船問屋佐藤次郎左衛門家は問屋の経営がしばしば窮地におちいったこともあったが、分家の与三郎家が最も栄え、最後まで残った。（表紙村絵図参照）現在では佐藤家は一戸も残っていない。

福地神社には佐藤家が寄進した陶製の狛犬や、明和元年（一七六四）の石灯籠二基がある。

6、福地神社

福地神社の祭神は^{おおもとのなま}大物主神すなわち^{おおくに}大国主神である。当社の記録は^{じゅうきやう}貞享四年（一六八七）洪水のため流失し、さらに天明二年（一七八二）と文化八年（一八一二）との二度の火災によって全くなくなったので由緒は明らかではないが、前にも述べたように福地神社はもと現在地の南方約五百メートルの字北村に鎮座していたのであるが、天明四年（一七八四）一説では享保一五年（一七三〇）に隼人神社が前から鎮座し



福地神社

ていた現在地に遷座されたといわれる。

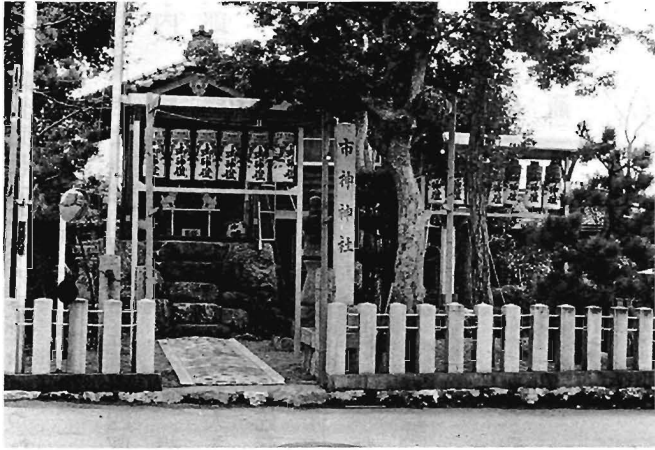
例祭は十月五日に行われ、境内は約一七〇㎡。

御神体は昔は阿弥陀如来の木像であったが、明治一一年（一八七八）十月三〇日直径三寸（約九cm）の円鏡を御神体とした。

境内には、隼人神社・白山神社・金刀比羅神社・御鋏神社・秋葉神社・馬神社及び春繁稻荷大明神が鎮座する。

7、市神社

村の東端に鎮座。創建年代ははっきり分らないが、栗笠が湊町として栄え又、前述したように享保一七年（一七三二）には六斎市が開かれ市場としても盛んであったため市場の守護神として勧請されたのであろう。祭神は大市姫神である。



市神社

8、須賀神社

村の西端に鎮座。創建年代ははっきり分らないが、村を災害や疫病などから守護するため勧請したもので祭神は素盞鳴尊（牛頭天王）である。



須賀神社

9、福地神社の祭礼

十月五日が例祭日で、他の神社ではちょっと見られない盛観である。

○太鼓やぐら

境内中央や、東よりに六・三m四方、高さ三・六mのやぐらが組立てられ太鼓三からがあげられる。

○獅子舞の舞台

境内の西南隅に設けられる。正面七・五m、奥行四・五m

○大提灯

栗笠名物の大提灯四張がある。高さ三・〇三m、直径二・〇三m、重量約一二kg、竹骨六五本の超大型提灯である。

昔は立派な絵を書いたが、現在は上下を赤・青で染め、中央に御神灯と横書する。



大提灯

○切子灯籠

高さ一・八m、長さ三・五m、巾〇・九mのものの一個。この切子灯籠は組立式になっており、修理改造のあとがあるが、文化・文政頃から献灯されていたようである。



切子灯籠

○絵灯籠

直径九〇cm、高さ一二〇cmの絵灯籠六張とこれよりやや大きいもの二張がある。

○二十四灯

高さ一五〇cm、直径四〇cmの灯笼二十四張を拝殿前両側に各十二灯づつ。

○五三の桐提灯

その他大小の提灯が約百十張点火され荘厳ななかに祭気分はいやが上にもたかめられる。

○辻の屋台



紅灯笼

村内には四か所の辻に屋台が立てられ各八張づつ、の御神灯がともされ。

○大

幟ノボリ

村内四個所に大幟が二本づつ、立てられる。



辻屋台

○獅子舞の奉納（第二章に詳述）

十月五日・六日の両日午後奉納される。

○祭踊りの奉納

十月五日・六日の両日獅子舞の終了後奉納される。

昭和三九年四月十日、養老町重要無形文化財に指定され、区民全体によって「栗笠祭踊り保存会」が結成されその保存に努力している。

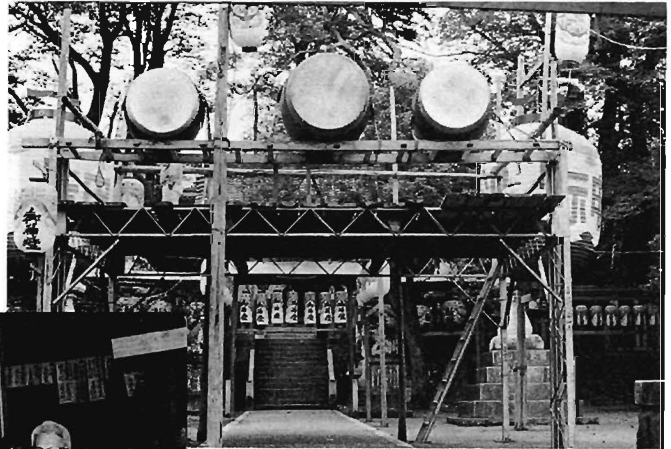
この踊りは、獅子舞と同様佐藤家が氏神福地神社に家内安全・五穀豊饒・村内和合を祈願して村人に奉納されたものと伝えられる。

踊りには「でんがらかし踊り」「どじょう踊り」と「白



大のぼり

太鼓やぐら



祭踊り

川踊り」の三種があるが「白川踊り」が踊られるようになったのは新しいことで大正の初期に若連中がとりいれたものである。

夕景せまる頃、獅子舞の最後「おかめの舞」が終ると太鼓やぐらの上に待機している太鼓方によって三個の太鼓が一斉に「でんがらかし」の打はやしが打鳴らされ、お祭りの行事は獅子舞から踊りへと引継がれていく。

踊りは「でんがらかし」と「白川踊り」が交互に踊られ、最後に「どじょう踊り」によって終る。

○「でんがらかし踊り」の囃子

〔太鼓〕

でん

ちゃか、ちゃか、ちゃん。

ちゃか、ちゃか、ちゃん。

ちゃか、ちゃか、ちゃか、ちゃん、

でんが、ちゃか、ちゃか、ちゃん、

でんが、ちゃか、ちゃか、ちゃん、

でんが、ちゃか、ちゃか、ちゃん、

でんが、ちゃか、ちゃか、ちゃん、

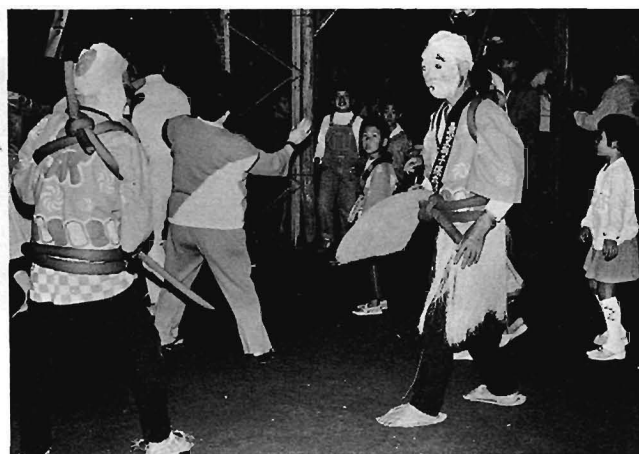
でんが、ちゃか、ちゃか、ちゃん、

でんが、ちゃか、ちゃん。

ちゃか、ちゃか、ちゃん。

打初め

繰返し



祭 踊 り

〔笛〕

ちゃか、ちゃか、ちゃん。

ちゃか、ちゃか、ちゃか、ちゃか、

ちゃか、ちゃか、ちゃん。

ひやらひやぶ、ひやらひやぶ、

ひやらひやひやぶろひや、

ちちひやらひ。

おちひよひよひや、

おちひよひよひやぶ、

繰返し

○「どじよう踊り」の囃子

〔太鼓〕

ど・ん・ か・ちゃん・

ど・ん・ か・ちゃん・

ど・ん・ か・ちゃん・

か・ちゃん・ か・ちゃん・ か・ちゃん・

か・ちゃん・ か・ちゃん・ か・ちゃん・

繰返す

〔音頭〕

「音頭とり」は二組に分かれ、交互にかけ合いで音頭をあげる。音頭はいろいろたわれるが、

「松坂こえて 今出たが

サーヨーヤトセー

何からいおやら申そやら

サーヨーヤトセー ヨーヤトセー

「わたしや他所他所所の者

しばらく間の 助音頭」

など最もよくうたわれ、優雅な踊りである。

○「白川踊り」の囃子

で・ん・で・こ・ で・が・ ちゃか

で・ん・で・こ・ で・が・ ちゃか

で・ん・で・ん・ で・こ・で・ん・ でん・

ちゃか、ちゃか、ちゃか、

繰返す

で・ん・で・ん・ で・こ・で・ん・ でん・

ちゃか、ちゃか、ちゃか、

テンポの早い踊りで若い人に好まれる。

踊りが佳境に入ると、二重、三重に太鼓やぐらを取巻く

踊手・見物客は数百にのぼり、境内を埋めつくしてしまう。

調子よく打込まれる太鼓の音は四方にとゞろき渡り、笛

も音もますますさえて踊手のさす手ひく手もあざやか、音

頭・太鼓・笛・踊手・見物客すべてが一体となつて踊り三

味惶惚の境地にひたつて時の移るのも忘れ、まさに神人一

如、共樂の世界が展開される。「にわかおどり」「仮装おどり」

も行われる。

昔は若連中が主となり、隣村からも多数の若者が参加し

て老若男女夜を徹して踊りあかし、又他村の祭りには踊り

にでかけたものであるがこの頃は十時半頃には終ることに

している。

第二章 栗笠の獅子舞

1、栗笠の獅子舞の起原

日本の芸能で獅子舞ほど全国に普及し、しかも民衆に愛好された芸能はあるまい。何よりも悪魔・悪霊を祓う強い呪力をもっていると信ぜられてきた。

栗笠の獅子舞の起原については徳川家康の家臣佐藤文三郎親定が家運隆盛と五穀豊饒、村内安全を祈願して家来たちに福地神社に奉納させたと伝えられている。しかし、家康の家臣に親定なる人物も不詳であるし、そんなに古いとも思われぬ。天明年間（一七八一―一七八八）かもっと下がって文化（一八〇四―一八一七）・文政（一八一八―一八二九）ごろであろうとの推測もある（岐阜県指定文化財報告書第一五巻）が、栗笠湊が繁栄を極めたこの頃がこの獅子舞も盛んに行われたものと思われる。

伊勢神楽の流れをくんだ三段獅子であるが（烏江村のものは五段獅子）散楽風（さんがくふう）のものを取り入れて滑稽（こっけい）、軽業（かろうぎょう）的な要素が多くなり、又、船頭さんたちが伊勢・尾張など諸地方で見聞したものを随時取り入れて他ではみられぬ四八種

目も作ったのであろう。しかも、軽業師のような曲芸的なものが多分にあることは身の軽い舟乗りの特性がそうさせたものかも知れない。また、滑稽なものが多いのも川湊の住民という軽妙酒脱を好む明るい気風が作用したものであろう。

栗笠の獅子舞は、たんに獅子舞として存続しているのでなく、かつての川湊としての繁栄をなつかしむかのように一連の祭行事を牧田川沿いの集落に保存しているところに特色がある。いわゆる「お祭り」的な騒々しさ、華やかさはなく、しっとりとした古風な祭りを今に伝えて山村とはまたちがったすがたい風物詩として残っている。（昭和四九年三月養老山系文化財調査報告書に拠る）

（参考）

佐藤文三郎親定なる人物について佐藤家系譜によれば、幼名辨吾、文三郎、親定と称した人物が安政五年（一八五八）に与三郎を襲名している。

昭和四五年八月一日岐阜県重要無形文化財に指定された。

2、獅子舞の奉納

獅子舞の頭屋（かしや）（当地では獅子宿という）は、昔は佐藤家であ

ったがその後は獅子舞伝承者代表の安藤佐七氏宅が頭屋となり、佐七氏の歿後昭和五六年は栗笠獅子舞保存会長宅を当てた。

頭屋で勢ぞろいした一同は行列を組み先ず村の東端に鎮座する市神神社に向かう。

行列の順序は

① 案内 二人

紋付羽織袴姿で各自弓張提灯を持つ。



行 列

② はっぴ姿の連中が、獅子頭・御幣・鈴・太刀・仮面・

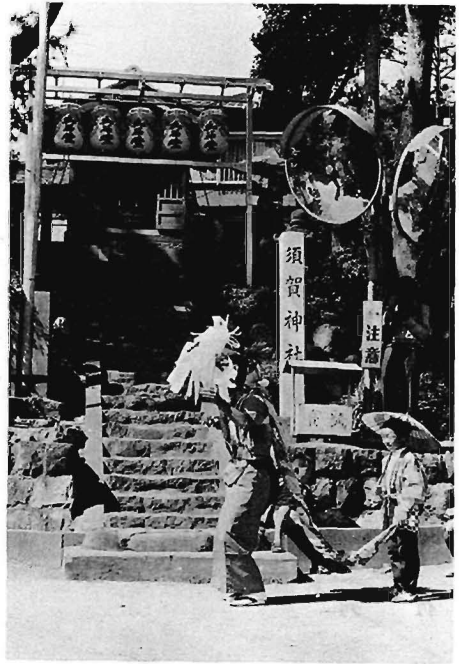
ざい等小道具を持って二列に並ぶ。肩車にのせられた太鼓をたき、笛を吹きながら進む。打ちはやしという。

③ 氏子役員・保存会役員・獅子舞伝承者代表等関係者が紋付羽織袴姿で随う。

先ず市神神社の社前で「鈴の舞」が奉納される。舞が終ると又、各戸に献灯をつるした町並みを進み、四か所の辻に建てられた屋台提灯の下をくぐって福地神社の前を通り村の西端に鎮座する須賀神社へ着く。こゝでも市神神社同



市神神社前の鈴の舞



須賀神社前の鈴の舞

様「鈴の舞」が奉納される。終ると道をもどって福地神社に入る。拝殿で「本乱の舞」がおごそかに奉納される。この舞はこの神前でだけ奉納されるもので最も神聖な舞とされる。

「本乱の舞」の奉納が終ると舞台での奉納がはじまる。「鈴の舞」からはじまって最後は「おかめの舞」で終る。

3、栗笠の獅子舞の基本となる舞

① 大廻り

舞人はかしら、あとまい共に長袖の白いシャツに紺の手ぬぎをし、紺又は黒のももひきを着る。

洞穴に眠る獅子が朝日の登るにつれて目をさまし、洞穴からしのび出て四方を警戒しながら、あたりを眺め眺め野へ山へと出かけます。この四方を眺めながら警戒する動作を「獅子をつかう」といいます。以下種々の動作の呼び方を（ ）内に示します。

洞穴から出てきた獅子は、時には急激に敵するものはいないかと左右を確かめます（シチ・シチ）。近くの安全を確かめた獅子は大きく立ち上がりながらのびをし身を振るわせて遠くの方をも再三確かめます（乱を振る）。更に四方を気にしながら進み、ちよつとした広場に出ます。そこで獅子は更に四方を確認し、左足・右足についた虫を口で取ります。そして大きく背のびをしながら身を振るわせます（乱）。陽光のふりそ、ぐ下で獅子は草むらに身を横たえて、左前足・右前足さらに体についた虫を口で取ります（羽虫取り）。虫を取り終った獅子はこんどは餌をとめて野山を駆け廻ります（餌ひろい）。お腹も満ちた後、

獅子は広々とした野原に出て種々の動作をして遊び廻ります(返り)。(この返りの部分の動作のちがいによって、ころころ、二人返りなどの種目が名付けられます。)遊び終った獅子は胸のどうきもはげしく、頭を下げて大きな息をします(トロ、トロ)。再び餌をもとめて野山を駆け廻り、お腹が満ちると又のびのびと遊び廻ります。やがて太陽も西に傾き、沈みかゝると獅子は餌をひろいながら洞穴へもどって来ます。洞穴へ入る前に獅子は大きく



のびをし、四方を眺めて遠く近くの安全を確かめ、更に洞穴に近づき、あゝ疲れたと前足をのびし、後足をのびして身を振わせ疲れをときほぐします(アブアブ)。そして、なおも遠く近くを眺め廻して安全を確かめ洞穴に入って行きます。

このように獅子が朝目をさましてから夜洞穴に入って眠るまでの一日を表現したのですが舞の中には常に敵を警戒し、四方を遠方も近くも眺め廻すという獅子の習性を表わす動作がいろいろと組み入れられています。

大廻りの舞は原則として雌雄二匹の獅子が同じように舞うことになっています。

「大廻り」の笛

ウヒヤラ、ヒヤヒヤブノヒヤヒヤブノヒヤラ、

チヨヒリ、チヨヒリヒヨヒリ、

オチヒリヒヨヒリ、

チヒリヒヨヒ、オチヒリオチヒリ、

三回くり返す

ヒツチツチ、ヒツチツチ、ヒツチツチチー、ヒヨヒヤ、

ヒヨヒヤ、ヒヨヒリリリリ……、

ヒヨヒヤ、ヒヨヒヤ、ヒヨヒリリリリ……、

ヒヨヒヤ、ヒヨヒヤ、ヒヨヒリリリリ……、

チツチヒヤヒヤブノ、チリヒヨチヨヒヤ、
チリヒヨチヨヒヤ、オチリヒヨチヨヒヤブ、
チヒリヒヤヒヤブノ、ウヒヤヒヤラチヒヤブ、
ウヒヤラチイヒヤブ、ヒヤブヒヤラチツチ、

チリヒヤ。チヨヒヒーリヒリヒリヒリ、
チヨヒリヒヨヒリヒヤ、チヨヒヒヨヒヤラヒヨ、
チヒヤヒヤブノ、チヒリヒヨヒヤラヒヨ、
チヒヤヒヤブノオチヒヤヒヤブノヒヤラ、
オチヒリヒヨヒヤラオチヒヤヒヤブノヒヤラ、

ウヒヤヒヤ——ヒヤブノヒヤラ、
ウヒヤヒヤヒヤヒヤブノヒヤラ、
チヨヒヤラチヨ、
チヒヤヒヤブノヒヤラヒヤラチヨヒヤ、
ヒヤヒヤブノチーヒヤブヒヤラ、オチヒヤヒヤブ。

ウヒヤヒヤ——ヒヤブノヒヤラ、
ウヒヤヒヤヒヤヒヤブノヒヤラ、
チヨヒヤラチヨ、
チヒヤヒヤブノヒヤラヒヤラチヨヒヤ、
ヒヤヒヤブノチーヒヤブヒヤラ、オチヒヤヒヤブ。

② 下^さり花^{はな}

舞人は長襦袢^{ながじゆばん}にたすきをかけて舞う。格式の高い種目の芸を舞う前にこの下り花が行われます。

獅子頭をかぶったかしらがあとまいのさし出す二本のさし出しにより、獅子頭をゆたんの奥深く沈ませて、左に右にと廻りながら手では近くをはき清めながら敵はいないかと確かめます。更に前面に進んで四方を確かめ、はき清めながら元の位置にもどります。

これから行う舞をゆつくりと楽しむ為に安全を確かめ、まわりをはき清める動作を表わした舞である。



③ 洞 入 り

服装は大廻りと同じで、かしら・あとまい・共に力帯をしめる。

大廻りの出初めのところで、獅子が洞穴から頭を出して左・右を眺め、敵に見つからない様にと体を地にはわせるようにして進み、左に右にと敵はいないかと眺めながら用心深く慎重に出ていくところである。

格式の高い獅子舞をする時の出初めの舞である。

4、栗笠の獅子舞の用語

① かしら(頭)・あとまい(後舞)(台) 一匹の獅子に二人の

舞人が入って芸をする時、頭及び前足の役をする人をかしらと呼び、後足の役をする人をあとまいと呼びます。芸によってあとまいのことを台と呼ぶこともあります。

② 三段獅子

栗笠の獅子舞は同じ動作を三回づつ繰返して行う場面が多いのでこのようにいいます。

③ 役獅子

獅子舞の内格式の高い舞を総称して呼びます。(5、獅子舞の種目の項参照)

④ 四方正面

役獅子の舞の中で、初めは正面に向かって芸をし、続いて右に廻り、左を正面にして芸をします。次に外を大きく廻り、右に右にと廻り込み右を正面にして芸をし、更に右に廻ってもとの正面にもどり、前面に出て芸をします。こうして四方に向かって同じような芸をするのを四方正面といいます。

⑤ 力 帯

直径四〜五cm位、赤い布で作った丸い帯で、しんには強い綱や布が用いてあります。腰に二回巻いて体の前面で結びます。かしらもあとまいも着け、芸によってかしら又はあとまいがこの帯をつかんどんだりねたりする時に力にするところから力帯といいます。

⑥ ゆ た ん

獅子頭に取付けられ、舞人の体を覆う布で、獅子の胴体を表わします。

⑦ 清 め 塩

獅子舞の始まる前や特に危険をとまなう芸、剣を使う舞などの時、舞人にけがが無いよう、又舞人の足がすべらないようにまかれる塩や水のことをいいます。

⑧ 道 行 き

獅子舞の舞の進行状態を表わすことばです。

5、栗笠の獅子舞の種目

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
蛙	前立の前行	三人返り	扇の舞	羽根越し	新返り	算盤ころころ	だんご	二人返り	ころころ	○鈴の舞	○本乱	種目名
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	番号
風車	○三本ざい	○猿ちようらかし	四人返り	○きびす返り	乱菊のもも立ちの前行	腰車	二人持ち	本返り	鐘巻の前行	○一本剣	○打ち掛け	種目名
36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	番号
鐘巻の後行	○三本剣	四人持ち	○なおり十六	○谷落し	前立の後行	うなぎ	五人返り	○合剣	六部	三人持ち	○お山の道中	種目名
48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	番号
○おかめの舞	○花がかり	○両剣	七人返り	五人持ち	乱菊のもも立ちの後行	○ひょうし返り	○剣呑み	六人返り	豊年返り	猫返り	○猿屋	種目名

○印は役獅子

6、栗笠の獅子舞四十八種目の説明

栗笠の獅子舞四十八種目の中には非常に高い芸域のものがあ、それらを文章で説明することは極めて困難なことでありますので、四十八種目それぞれの特徴と芸のみどころだけを述べることにいたしました。

① 本乱



本乱

四十八種目ある獅子舞の中で、この舞だけが神前（神殿）で奉納されます。神様の御守護に対する感謝と、今後



本乱

の御守護をお願いする舞で、すべての舞の基本でもあります。

着物を着た舞人（着物を着て舞うのは本乱だけである。）があとまいのさし出しにより獅子頭を体の奥深く沈めて、洞入りからはいります。静かに静かに舞います。羽虫を取った獅子はより元気になり、体中に喜びを表わします。（こ、でさし出を除く）かしらとあとまいは心を合わせて、嬉々として大廻りの舞を舞います。

② 鈴の舞

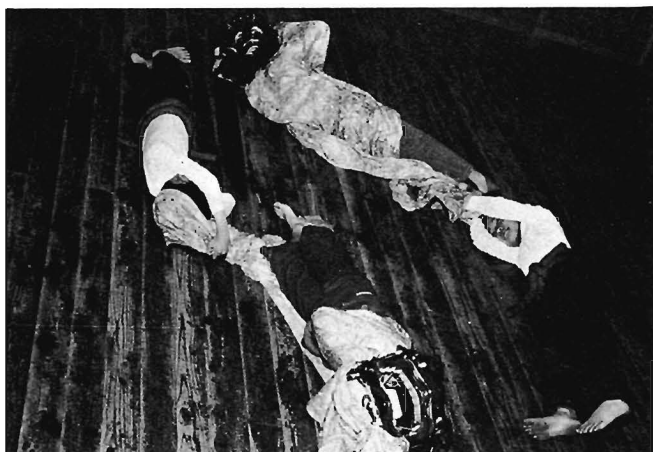
下り花から始めます。下り花がすんでから左手に御幣、右手に鈴を持ち、御幣を内に廻転させながら鈴を振り、東の方神様、西の方神様、南の方神様、北の方神様と四方正面でお祓いをし、お清めをする舞です。時には観客の中に入ってお祓いをする事もあります。ゆたんをしぼり巻いて太い綱のようにし、その先端を道化役が持つて興を添えることもいたします。舞人は長襦袢を着ます。



鈴の舞

③ ころころ

大廻りを基本とする舞で、大地の上で獅子が寝ころび、か・し・らとあ・と・ま・い・がそれぞれ左に右にところげ廻り、胴の所でねじれたり、もどしたりして遊ぶ所作を表わしたものです。



ころころ

④ 二人返り

大廻りを基本とする舞で、かしらは獅子頭を頭に着けて前に立つ、あとまいはかしの力帯を両手で上からにぎり、かしの股間に後から頭を入れます。この時かしらは両手を後にのばしてあとまいの肩にかけます。掛声と共にかしらはとび上がり、あとまいの肩の上をとびこえて後方に立つ、あとまいは、そのまゝかしらにつれて同じようにとび、初めの姿にもどる。これを数回くりかえして行う。



二人返り

⑤ だんご

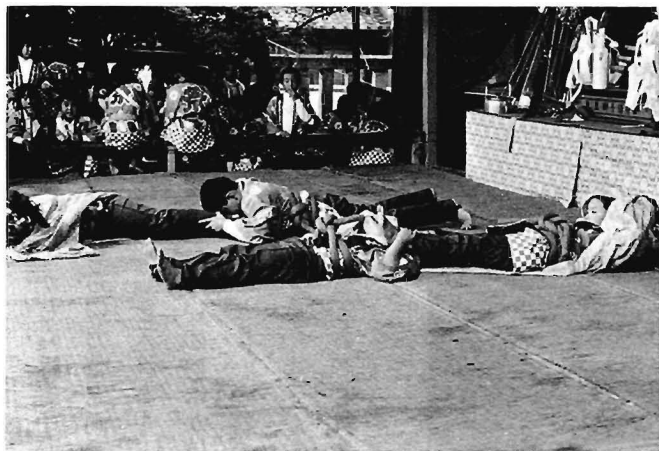
大廻りを基本とする舞で、かしらは獅子頭を頭に着け、あとまいと向き合って正座し、互に相手の肩にかつげるように両手で相手の胴をかかえ、交互にかつぎあげながら後に越させて座りながら舞台を一廻りする。



だんご

⑥ 算盤ころころ

ころころに似た舞で、左に右にころげ廻る時、あとま
いはかしの足首を両手でしっかりとにぎり、首の両側
につけて、二人呼吸を合わせて同じようにころげ廻る。



算盤ころころ

⑦ 新返り

大廻りを基本とする舞です。かしらは獅子頭を頭に着
けて、体に大きくはずみをつけて手をつかずに前方空中
廻転して立ち上がる。この時、あとまいはかしの廻転の
補佐をする。



新返り

⑧ 羽根越し

大廻りを基本とする舞で、かしらは獅子頭を両手で持ったまゝ立ち、あとまいはかしらの力帯を両手で下から持つ、二人呼吸をあわせ、イチ、ニとはずみをつけてかしらはあとまいの頭の上をとび越し、あとまいはこれにつられて、かしらの背の上をころがって後にもどる廻転わざで、之を何回もくり返し行う。



羽根越し

⑨ 扇の舞

三人で舞います。長襦袢を着て獅子頭をかぶり、ゆたを体に巻いた舞人の両側に長襦袢・たすきがけの舞人が一人づゝ、横一列に並びます。それぞれ左手に日の丸の扇を、右手に鈴を持ちます。三人とも同じく体の正面・左・右にと三回づゝ、扇を廻しながら舞います。正面に出て三人の扇を円形に合わせて鈴を切る等はなやかな舞で、四方面で行います。



扇の舞

⑩ 三人返り

大廻りを基本とする舞で、二人返りの時のあと・まいの
後にもう一人がはいり、三人が力帯を持ってつながり、
後の人の肩・背を越えて廻転する。



三人返り

⑪ 前立の前行

大廻りを基本とする舞で、かしらは獅子頭を両手に持
ち、あと・まいがかしらの力帯を持って引上げたらかしら
はとび上がってあと・まいの力帯に両足の親指をかけて立
つ、あと・まいは右手はそのまゝ、かしらの体をさゝえ、左
手でゆたんを広げてはぐたかせながら前進して舞台を一
廻りする。そこであと・まいはかしらの力帯を上から持つ
て一回二回とはずみをつけてかしらは獅子頭を先にあと
・まいのまたの中をくぐり、共に横になりながらもとの姿
勢に立ち上がる舞で、大へん力のいる舞です。



前立の前行

⑫ 蛙

大廻りを基本とする舞で、かしらは白足袋をはき、あとまいは黒足袋をはきます。返りのところでかしらは両手で獅子頭を持って中腰になります。あとまいはかしらの後からかしらの股に両足をのせ、おぶさるようになして乗っかゝり、両手でゆたんを張って、獅子頭が体の奥に沈んだようにし、そのまゝ、かしらは前進して舞台を一廻りします。おりる時には獅子頭をあとまいは受け取ってかしらの前へお

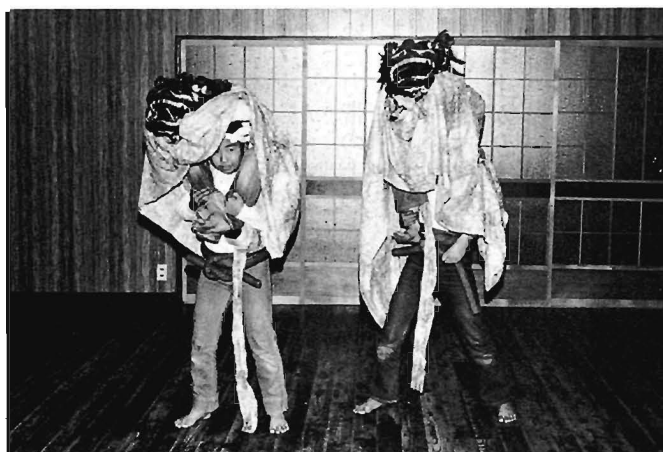
ります。次の返りで同じ事をし、てかしらとあとまいはもとにもどります。舞の途中でかしらとあとまいが入れ変わるのもじってかえると呼ぶ、変わるのをはつきりわかるようにする為に足袋の色を黒と白とにわけてはきます。



蛙

⑬ 打ち掛け

大廻りを基本とする舞です。かしらは、あとまいの後へ廻り、その両肩へ逆立ちして両膝を掛ける。あとまいはかしらの両足首をもって体をやゝ前方にかがめてゆっくりゆっくり歩く。あとまいの背に頭を下に背中合わせで乗ったかしらは獅子頭をできるだけ上にあげてあとまいの歩みにあわせて獅子を使う。



打ち掛け

⑭ 一本 剣

下り花から始めます。舞人は、長襦袢にたすぎがけで獅子頭をかぶり、ゆ・た・んを体に巻きつけます。舞人は、左手に剣、右手に鈴を持ち、体の前面で剣を三回廻し、左に向き、又右に向いて同じ様に剣を三回づゝ廻します。続いて剣を右肩にかつき勢よく左足先に切り込み右足で三回跳び、次に同じ様に反対より足先に切り込み左足で三回跳びます。剣を体の前面で手をいっぱい伸ばして横向きにかゝげて前面に出て、同じ事をくり返します。元にもどる時は、正面の時は、廻ってそのまゝ歩いて来ますが、左・右・正面の時は、両手をいっぱいひらいたり、体の前面で交差させたりして、剣で切り廻しながら

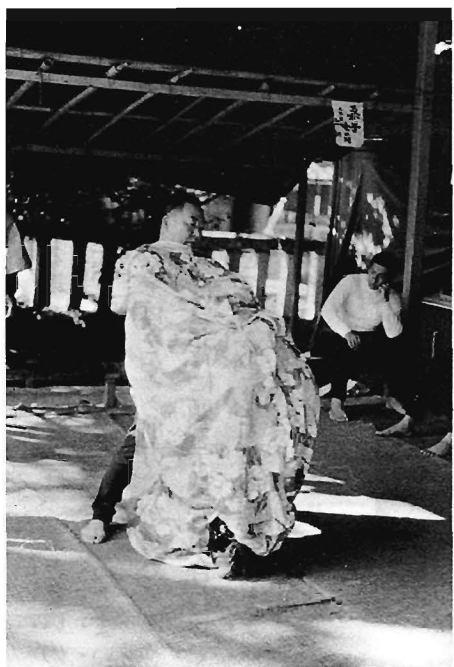


一本 剣

後向きで跳びながらさがります。最後の正面の時は、両手首を合わせて剣と鈴を合わせ、左に右にと切り廻し、跳びながらもどります。四方正面で舞われます。

⑮ 鐘巻の前行

大廻りを基本とする舞です。「前立の前行」と同じようですが、か・し・ら・が・あ・と・ま・いに乗る時、か・し・ら・は・あ・と・ま・いの腰に巻いた力帯の上のところの胴に両足で巻きつき、あ・と・ま・いは右手でか・し・ら・をさゝえ、か・し・ら・は胸を張って舞台を一廻りし、おる時はあ・と・ま・いのまたをくぐって横になり立ち上がります。



鐘巻の前行

①⑥ 本 返 り

大廻りを基本とする舞です。羽根越しと似た返りで、かしらがあとまいの体の上を越える時、あとまいは頭を左にかたむけ、かしらの体を右肩越しに越えさせて廻転する芸です。



本返り

①⑦ 二 人 持 ち

大廻りを基本とする舞です。返りのところで舞人とは別に力自慢の男が出て、力帯を大きく輪にむすんだものを左右の肩から両わきにかけて、かけた力帯にそれぞれ二人がお尻を入れて乗ります。力自慢の男は二人を両脇につるして、手で日の丸の扇を振りながら舞台を廻る芸です。



二人持ち

⑱ 腰 車

大廻りを基本とする舞です。かしらはあとまいの腰に巻いた力帯の上に両足で胴を巻くようにして乗り、あとまいはかしらの力帯を両手で上から持ってかしらの体をさ、えます。そして、その場で両足をばたばたさせながら左に二、三回元氣よく廻ります。この時かしらの上体が多少上・下にあぶつようにし、かしらは両手をいつぱいのばして持った獅子頭を左・右にゆさぶるように振ります。



腰 車

⑲ 乱菊らんぎくのもも立ちの前行まえゆき

大廻りを基本とする舞です。あとまいは中腰になり、かしらの力帯を両手で上から持って支えます。かしらはあとまいと呼吸をあわせて、はずみをつけてとびあがり、あとまいの膝の上に両足でしっかりと立ちます。かしらは獅子頭を両手いっぱいには伸ばし、左右に振る。そしてあとまいは左手でゆたんを振るわせながら舞台を一廻りし、おりの時は、かしらの上体を上下に少しはずみを付けてあとまいのまたをくぐり横になりながら立ちあがります。



乱菊のもも立ちの前行

②⑩ きびす返り

大廻りを基本とする舞です。かしらは獅子頭をかぶって両足をふんばって両手を上げて広げます。あとまいはかしの後近くに寄ってさか立ちし、かしの広げた両手の間に足をかけます。かしらはあとまいの足首を両手で持つて前かきみになりながら頭を越させて前に立たせる。続いて同じ事をかしらは行う。次にあとまいがかしらにさか立ちでかろうとした時にかしらは横にとび

のく。はずみをくったあとまいはあおむきに舞台でひっくりかえってたおれます。このだますところがおもしろくて、これを二、三回くり返す。しかし、かしらには獅子頭をかぶっているのです、だましをかけることになっていきます。



きびす返り

②⑪ 四人返り

大廻りを基本とする舞です。「三人返り」の後にもう一人連なり、「三人返り」と同様かしらから廻転する芸で、かしらがとび上がると同時に最後の人は前に進むようにあたまで押しながらかつて連られて廻転して行く。



四人返り

②② 猿ちようらかし

洞入りから始めます。一匹の獅子が野山に遊んでいて、道端に一匹の猿を見付けます。初めはめずらしいのと恐いのと両方で遠くからながめます。猿は獅子の恐さで身動きもできず、ふるえながら身をすくめています。獅子は周囲を気にしながら前足で猿にちよつかいをしながら猿の回りを右に左にと廻り、時々猿に近づいてはとびさがり、又、回りを廻りながらじりじり近づきます。やが



猿ちようらかし

て猿に夢中になった獅子は猿の前にしゃがみこんで前足で猿をもてあそび、ちようらかしながら遊び、ついに猿をのみこんでしまいます。猿をのみこんだ獅子は、あ、つかれたと両足を上にしてねころび、四つの足をなめて、つかれをいやし、次に喜んでとびはねる（羽根越しをする）舞です。



猿ちようらかし

②③ 三本ざい

下り花から入ります。鈴の舞を中心に、両側にははつ・び・も・も・ひ・き・姿・にお・か・め・ひ・よ・つ・と・この面を付け、ほお・か・む・り・を・し・た・舞・人・が・長・さ・一・三・m・位・の・ざ・い・を・左・手・右・手・に・鈴・を・持・つ・て・横・一・列・に・並・び・ま・す。獅子頭をつけた舞人は

鈴の舞を舞い、その舞に合わせて両側の舞人は、体を大きくそらせ、ざいを手いっぱい伸ばして頭の上で廻しながら左・右と舞います。前に出る時は体をそらしたまゝ、ざいを廻してとぶように歩きます。途中に切込みといって、ざいを合わせ、両側の舞人が背を合わせて座り、首をねじって顔を見合わせバアー・バアーと声をかけ合うユーモラスな場面もあります。四方正面で行います。

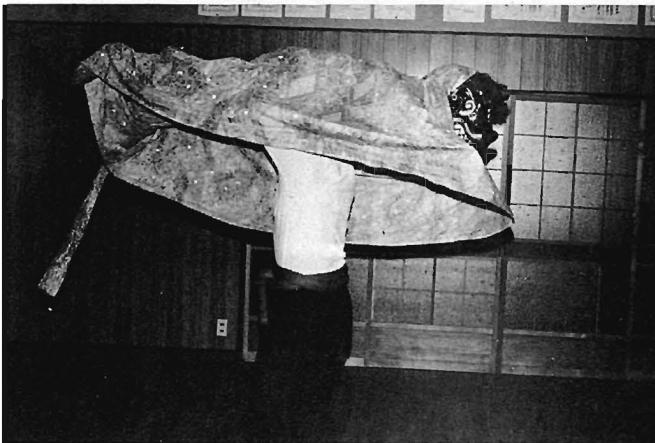


三本ざい

②④ 風車

大廻りを基本とする舞です。かしらは力帯を二本しめ、獅子頭を頭に着けて、あとまいと向き合う。あとまいはかしらの力帯を巾広く両手で指を下からくぐらせて、しっかりとにぎり、頭をかしらの二本巻いた力帯の間へ当ててはずみをつけて頭の上へ乗せて立つ、かしらは下向きで、その手足の先にゆたなをかける。この

姿勢がとれたらあとまいは、その場でじだんだをふみながら左に二、三回・右に二、三回廻る。かしらは頭を振りながら手足を多少上下させゆたなをばたばたさせる。別名を「大の字」ともいう。



風車

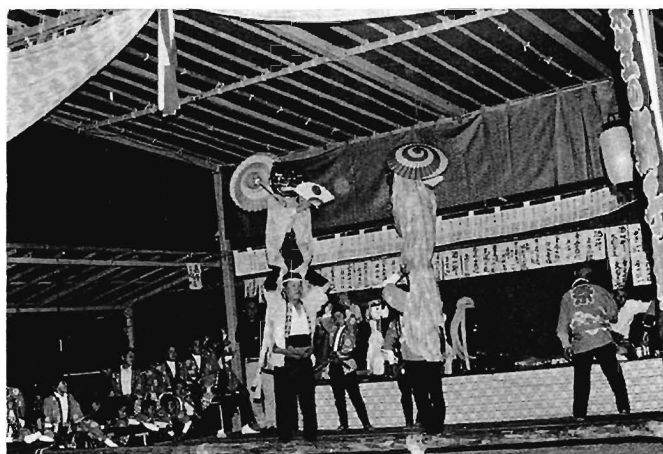
②⑤ お山の道中

大廻りを基本とする舞です。あとまゐの肩の上に、かしらは獅子頭を頭に着けて立ちます。あとまゐは自分の頭と両手でかしの両足を固定させ、腰を少しおとし、片足ずつ斜め前に出しては後足をひきつけてそろえて立ちます。この動作をくりかえしながら舞台をゆっくり、ゆっくりと廻ります。かしらはこの時、初めは獅子頭の下ごのゆたんとをしばって両手で持ち、あとまゐ(この時は台とよぶ)の歩みにあわせて左に右にと振っていきます。続いてかしらは日傘を左手に持って右肩にかつぎ、右手に



お山の道中

は日の丸の扇を持って台の進みにあわせて扇を左肩に振り振り、又右手をいっぱい伸ばして右上に振りかざします。舞台を一周又一周と台の力の続くかぎり舞います。静かでお品のある大へん見ごたえのある舞である。



お山の道中

②6

三人持ち

大廻りを基本とする舞です。二人持ちの時の形にもう一人肩車をさせて乗せ、三人を乗せて歩く芸です。

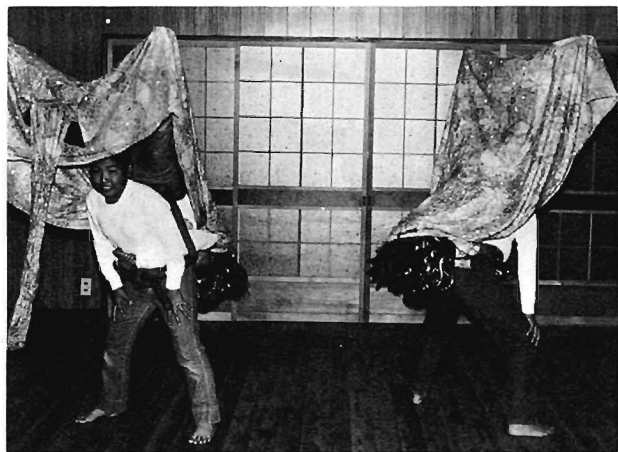


三人持ち

②7

六部

大廻りを基本とする舞です。獅子頭を頭に着けたかしらはあ・と・まいと向き合う。あ・と・まいは上体を前にかぐめ腰をおとす。かしらはあ・と・まいの背へ腹ばいになり、頭を下にして逆立ちとなり、股をあ・と・まいの首のどこへつけ、下腹へ両手を回してしっかりとあ・と・まいの背につかまります。あ・と・まいが上体をや・おこすとかしらの両足があらるのでかしらは両足をいっぱい広げ足先にゆ・た・んをかけて、舞台を廻る舞です。



六部

②⑧ 合 剣

下り花から始めます。獅子頭をつけた舞人の左側に長襦袢にたすきがけ、ほおかむりをした舞人が立ちます。二人共左手に剣右手に鈴を持って一本剣のように剣を廻しながら舞います。正面を変える時かしらは右廻り、相



合 剣

手は左に進み、かしらが左正面になった時は相手は前方に向き合った形になります。そこで二人共前進し、出合ったところで剣を合わせあって切り込みを致します。かしらはすべて右に右にと廻り相手はこれに向き合うように進んで四方正面で行います。



合 剣

②⑨ 五人返り

大廻りを基本とする舞です。四人返りの後にもう一人加えて五人で廻転跳び廻りをするものです。



五人返り

③⑩ うなぎ

大廻りを基本とする舞です。「だんご」と同じ要領で、立って行う舞です。



うなぎ

③① 前立の後行まえだちのあとゆき

大廻りを基本とする舞です。「前立の前行」と同じように舞台を廻ります。おける時にはずみをつけてかしらはあ・と・ま・いの頭を越えて後における。あ・と・ま・いもかしらにつれて後におりたかしらの背の上をころがって後に立つものです。この時あ・と・ま・いはかしらの力帯を下から指を入れて持つ。



前立の後行

③② 谷落し

大廻りを基本とする舞です。かしらは左手で獅子頭を持ち、少し前かゝみの中腰になり、あ・と・ま・いの首を右手で巻いてしっかりと自分の力帯をにぎります。あ・と・ま・いはかしらの力帯を両手を広げてしっかりとにぎりかしらの背の上へ逆立ちをします。この形でかしらは横歩きで舞台を一廻りする。おける時は、あ・と・ま・いはそのまゝ、足をおろしてきてかしらの前に座るようにおり、かしらの力帯をそのまゝ、引いて自分の頭の上を通してかしらをおろします。



谷落し

③③ なおり十六

大廻りを基本とする舞です。「きびす返し」を正座した形で言う舞です。



なおり十六

③④ 四人持ち

大廻りを基本とする舞です。三人持ちの時の形に力自慢の男は力帯を輪にむすんだものを自分の首から前にたらし、そこにもう一人を乗せて歩く芸です。



四人持ち

③⑤ 三 本 剣

下り花から始めます。長襦袢にたすきがけの三人が横
 一列に並んで舞う。中の舞人は獅子頭をかぶり、両側の
 舞人ははおかむりをし、それぞれ左手に剣を右手に鈴を
 持って一本剣のように三人あわせて舞います。正面に出
 た時には切り込みといって三人が剣をあわせて切る場面
 もあります。四方正面で行われます。



三本剣



三本剣

③⑥ 鐘 巻 の 後 行

大廻りを基本とする舞です。「鐘巻の前行」と同じく舞
 台を廻り、おる時かしらはあ・と・まいの頭の上をとび越
 しており、更にあ・と・まいはかしらの背の上をころがって
 おります。やはりこの時はあ・と・まいはかしらの力帯に指
 を下からさしこんでにぎります。



鐘巻の後行

③⑦ 猿 屋

変形的な洞入りで始まります。山道を猿を肩にのせた猿廻しが行きます。獅子に見つかり、右に左に逃げまわるのですが、ついに猿を獅子に取られてしまいます。猿をか、えこんでうずくまった獅子から猿を取り返そうとし猿廻しは左から右からあるいは正面からと獅子にとびか、って行くのですがどうしても取り返すことができ



猿 屋

猿 屋



ません。つかれはてた猿廻しは、少しはなれて獅子の正面で座り込みます。肩より荷物をおろし、獅子にちよっかいをかけながらべんとうを食べたり、煙草(たばこ)を吸ったりいろいろの所作をします。西の山に日が沈みかけます。手をかざして太陽を眺め、時計を見たり、次第に暮れていく日に猿廻しは、やむなく度胸をきめて立ちあがり、小便をして、はち巻きをしめ直して獅子にとびかかります。二回、三回するう

ちについに猿を取り返しますが、その途中で何度も獅子に出会ってとびあがるやら、にげまわるやらで、ついには獅子も猿廻しもつかれはて、猿廻しはきりきり舞をしてあおむけに大の字になって伸びてしまふというコミックな芸で人気舞の一つです。

③⑧ 猫 返 り

大廻りを基本とする舞です。正常な形で構えているか・しらの尻の所をあと・まいはちよつと前へ進んで、頭でとーんと突きます。これを合図にかしらとあと・まいは同時に右廻りに横に寝ころび廻転しながらびよんと転やかに立ち上がり、もとの正常な形にもどる。猫の身軽さをまねた芸です。



猫返り

③⑨ 豊年返り

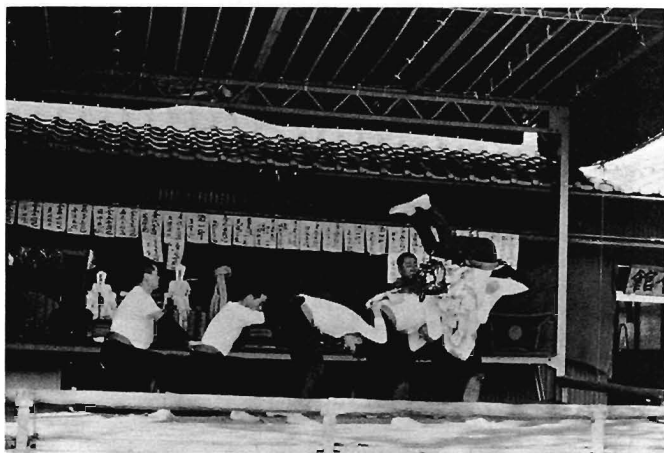
大廻りを基本とする舞です。「うなぎ」に似た舞で獅子頭を頭に着けたかしらは、あと・まいと向かい合つて構え、お互いの体を右肩にかつぐような形に体をねじつて、両手でしっかりと相手の胸をだきかゝえ、肩にはかつがずに横に振るように後へ後へと軽やかに廻り歩く芸です。



豊年返り

④〇 六人返り

大廻りを基本とする舞です。五人返りの後にもう一人加わって、六人で廻転跳び廻りをするものです。「五人返り」位からは特に技のいる芸で、廻転する時六人目の人は舞台の天井につかえるかと思う位に跳び上がり、勇壮な舞です。



六人返り

④① 剣呑み

洞入りから始めます。山野に遊ぶ獅子が道端にきらりと光る剣を見つけます。獅子は剣が何なのかよくわからず、こわいもの見たさで遠くから左に右にと足をしのばせて眺め廻ります。時にはつ、つと近寄ってみますがすぐにとびのきます。きらりと光るものが少しも動かないので、次第に大胆になり、近くによって右から左からと眺めます。そして、ついには剣を口にくわえ、体を一回



剣呑み

転させて剣を呑んでしまいます。ほっと一息ついた獅子は喜んで大の字（あ・と・ま・い）に向かい合ったかしらは頭に獅子頭を着けて、あ・と・ま・いの手助けによって、あ・と・ま・いの頭の上に腹をつけて乗り、四肢を広げて伸ばし手足の指にゆ・た・んをかける。あ・と・ま・いはかしらを頭に乘せて両手でかしらの力帯をもってさ・え、じだんだをふみながら左に右にと廻ります。この時かしらは手足を上下に振ってゆ・た・んを振るわせる芸をし、ねぐらに帰る舞です。



剣 呑 み



ひょうし返り

④ ひょうし返り

大廻りを基本とする舞です。二匹の獅子で舞います。あ・と・ま・いは、それぞれおかめの面とひ・よ・つとこの面をつけ、ほかむりをします。二匹の獅子は左右に分かれて舞い、あ・と・ま・いは尾のところからゆ・た・んの外顔を出します。笛にあわせてかしらは獅子頭を廻転させながら右に左にと横あるきをします。あ・と・ま・いは両手をひろげ、かしらの廻転によ

って胴のところ
でねじれたゆ・た
んを廻り跳びし
ながらもとにも
どします。面白
いユーモラスな
舞です。

④③ 乱菊のもも立ちの後行

大廻りを基本とする舞です。「乱菊のもも立ちの前行」と同じように舞台を廻ります。おりる時あ・と・まい・は・かしらの力帯を持つ手を下からさしこんで持ち変え、はずみをつけ、かしらはあ・と・まいの頭の上をこえており立ち、あ・と・まいもかしらにつられてかしの背の上を廻り及びしており立ちます。



乱菊のもも立ちの後行

④④ 五人持ち

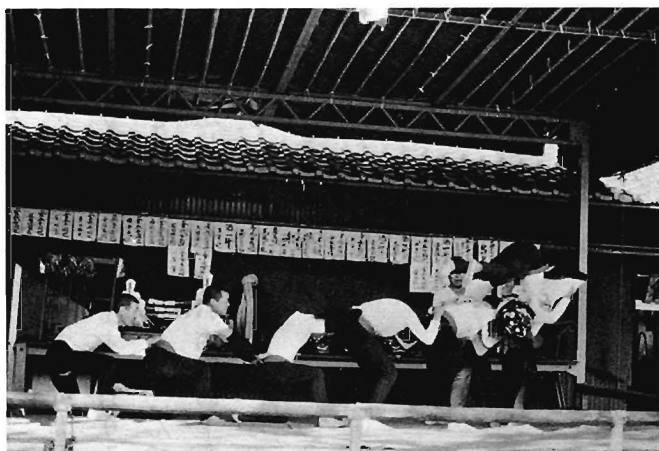
大廻りを基本とする舞です。「四人持ち」の形に力自慢の男はもう一人とばかり、肩車でのせている人の上に更に一人肩車にのせ、上二人、両脇に一人づつ、前に一人と計五人の体重をさ・えてのっし、のっしと舞台を歩く、大へんな力芸です。



五人持ち

④⑤ 七人返り

大廻りを基本とする舞です。「六人返り」にもう一人加わり七人で廻転跳び廻りをするもので、かしらが跳び上がるのと同時に後の方の舞人はどんどん前におし出し、次つぎにとび廻っていく芸で、芸の中では花形とされ、誰一人でも、うっかり前の人の力帯から手をはなせば大けがにつながる大へんなもので、アクロバットの芸です。



七人返り

両 剣



④⑥ 両 剣

下り花より始めます。長襦袢にたすきがけの舞人は頭に獅子頭を着け、ゆたんで体を巻き、両手に剣を一本ずつ持ちます。一人舞です。持った剣を刃こぼれはないかながめたり、切りつけたりした後、四方に住む悪魔を追い払い、切り払って住みよい里にするための悪魔拂いの舞である。特に切込みの場面は勇壮で見たえのある舞で四方面で舞われます。



両 剣

④ 花がかり

この舞は、夕方うすぐらくなる頃から始まります。

雄獅子、雌獅子二匹によつて舞います。太陽は西の山にかくれ、月がこうこうと照らす光にさそわれて雄雌の獅子が野山に遊び愛をさ、やき合います。野中の一本のぼたんの花木（舞台では台に椿の木を立て、それに紅提灯十二個つけ火をともして花に見たてます）を中心に雌雄の獅子は向かい合つて、あ・と・ま・い・の・さ・し・出・しにより、獅



花がかり

子頭をゆ・た・ん・の奥深く沈め、相手の動く動作の物音をたよりに舞います。四方を眺めたり、互いに熱いまなざしでながめ合いながら愛をさ、やき恋に酔い、甘いぼたんの蜜をすゝり合つたりして四方正面で舞います。うす暗い舞台の上で静かに静かに舞われる中に勇壮な場面もあり、優雅で心にじーんとひびいて来るような感動を受ける舞です。



花がかり

④8 おかめの舞

下り花から始めます。かしらは鈴の舞を舞います。かしらは獅子頭のゆたんを丸めて带状にし、その先は道化役が持ちます。(以下かしらを獅子と呼びます)獅子は自分の右側に妾(めかけ)はでな中振を着て、頭にはつのかくしをした女装の舞人(を)をしたがえて舞い、妾・本妻



おかめの舞

はそれぞれ提灯を持った案内人に足元を照らしてもらいながら左手に扇子、右手に鈴を持ち、扇子は顔の前で廻しながら舞います。「合剣」の時の道行きで廻ります。それに「振り込み」(ちやれ男が大きな男のシンボルを着けて舞う)も加わります。獅子は妾をつれて舞い、本妻は反対側に向き合って舞う。舞台の中心で出会う切込み場面では、振り込みが妾の前に男のシンボルをおしつけ、



おかめの舞

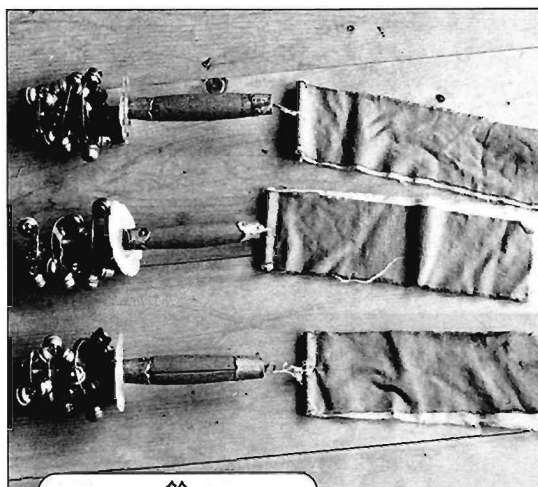
笛にあわせて行うセックスシーンも見られ、事後処理した紙は福の神（拭くの神）と呼ばれ、見物人の間で奪い合う風景も見られます。四方正面で舞われ大へんにぎやかな舞です。この舞が終りに近づく、太鼓やぐらの上で打ちならす「でんがらかし踊り」の太鼓がひびき、お祭りは獅子舞から祭踊りに引継がれていきます。

おかめの舞



おかめの舞を終わって宿へ帰る

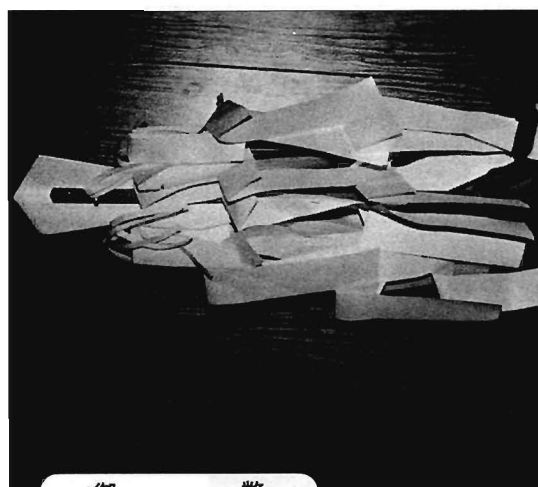
7、獅子舞の主な諸道具



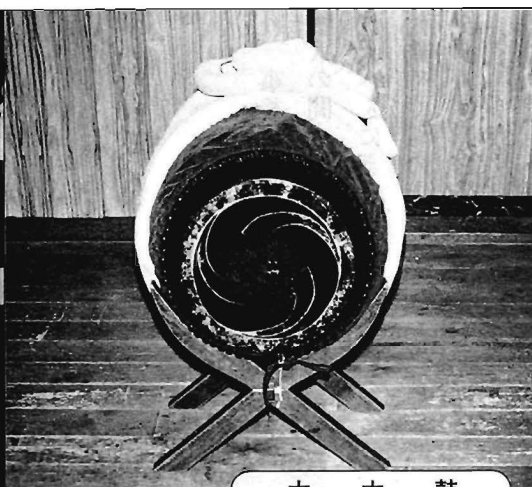
鈴



獅子頭とゆたん



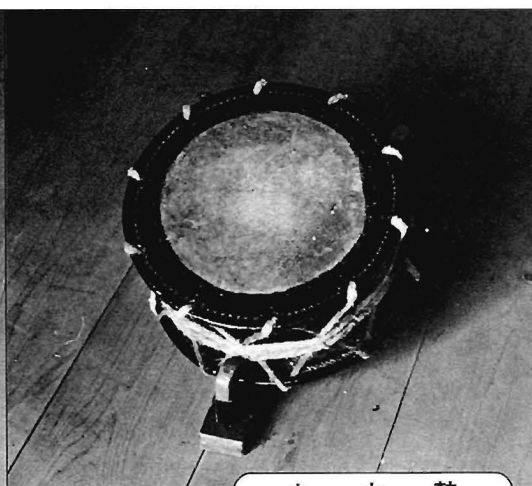
御幣



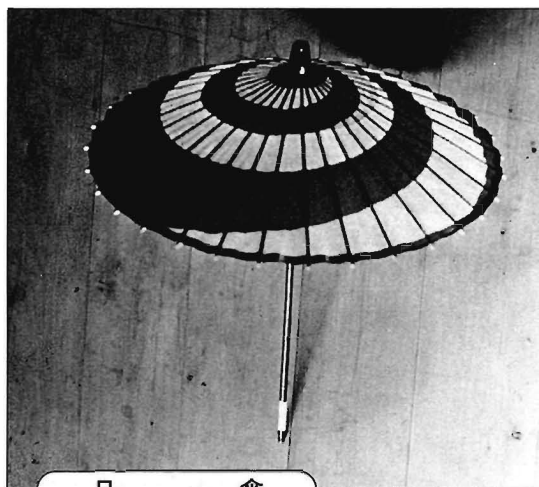
大太鼓



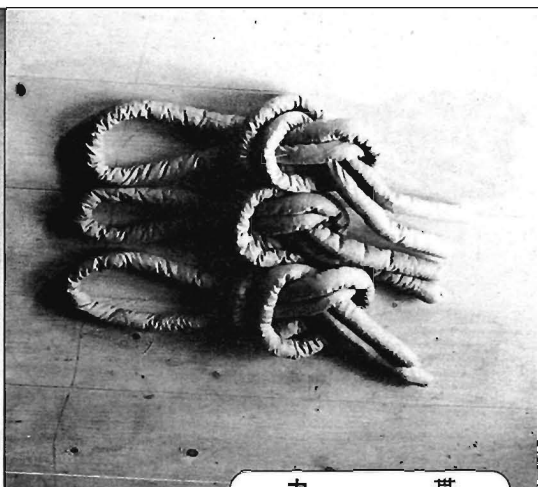
剣



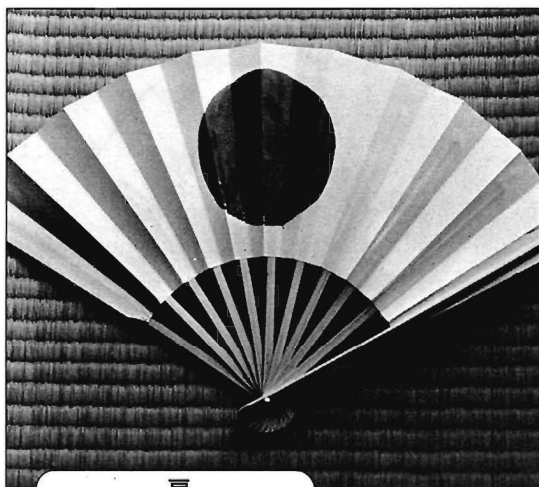
小太鼓



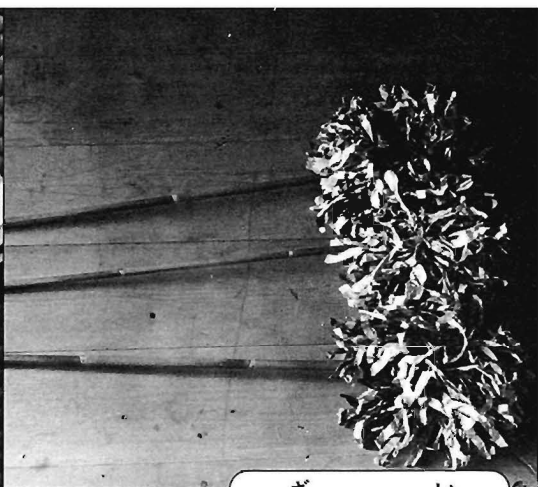
日 傘



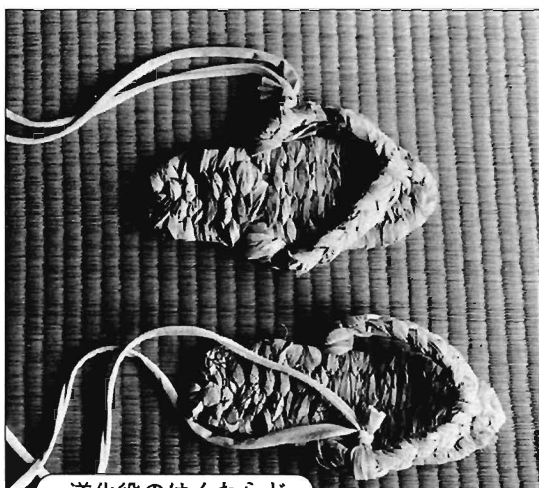
カ 帯



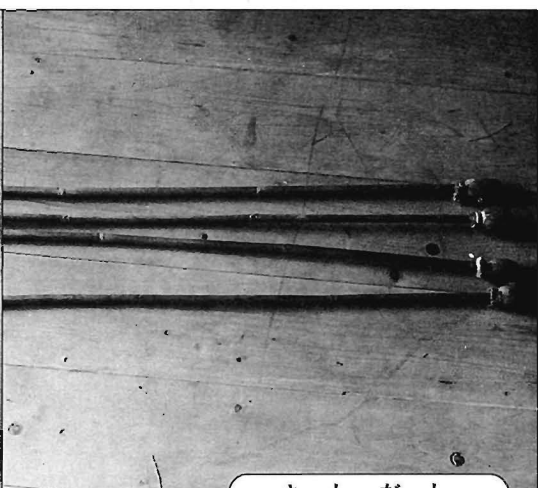
扇



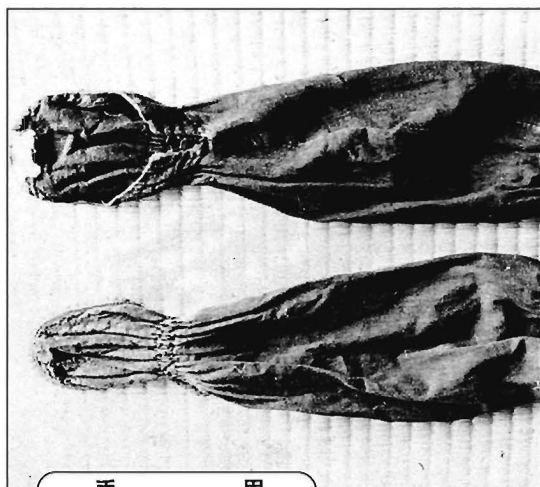
ざ い



道化役のはくわらじ



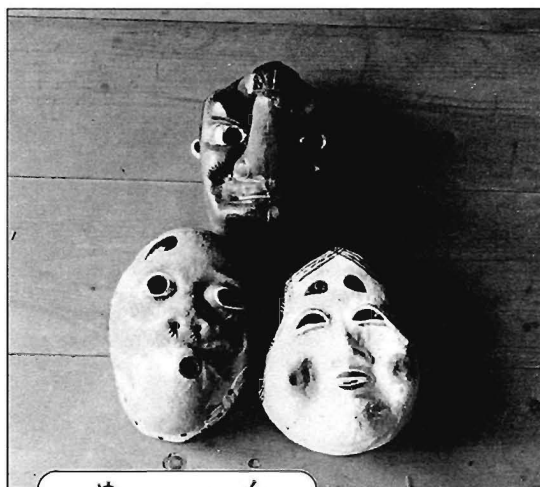
さ し だ し



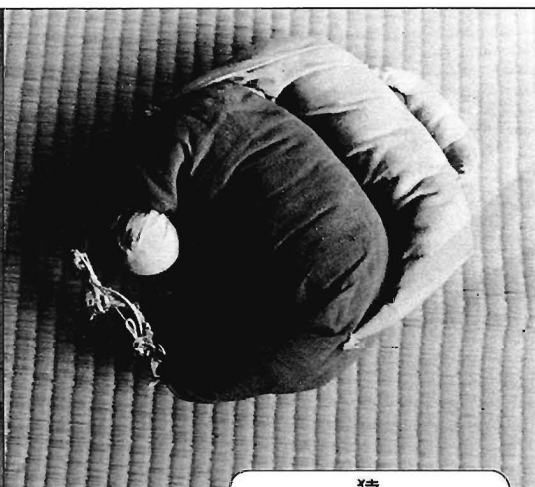
手 甲



「おかめの舞」につかうもの



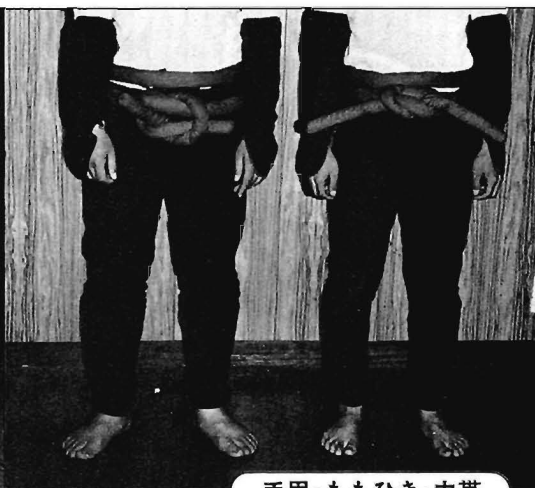
め ん



猿



保存会提灯



手甲・ももひき・力帯

8、栗笠の獅子連中規約

第(名称)一条

本会は栗笠の獅子連中と称する。

第一章 名称

第(目的)二条

2 本会は事務所(宿)を運営委員長宅に置く。

本会は「栗笠の獅子舞」保存会(以下保存会と呼ぶ)を母体とし、岐阜県重要無形文化財「栗笠の獅子舞」の顕彰と向上、且つ永遠に正しく伝承する為に会員協力して貢献する事を目的とする。

第(事業)三条

本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 一、福地神社の祭礼に獅子舞の奉納をする。
- 二、「栗笠の獅子舞」の芸向上の為、必要に応じて芸の研究、習得をする。
- 三、永遠に正しく「栗笠の獅子舞」を伝承する為、お囃子や獅子舞を広く指導する。
- 四、地区外の文化財関係との交流をはかり、且つ又、芸と関する折衝等を行う。
- 五、必要に応じ地元は基より、地区外に於ても「栗笠の獅子舞」の奉納や披露をする。
- 六、その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第(会員)四条

本会の会員は次のとおりとする。

第二章 会員

- 一、「栗笠の獅子舞」のお囃子、獅子舞、その他の世話に関与する者で中学生以上の男性。
- 二、保存会の会長及び代表者二名、福地神社氏子役員(以下氏子と呼ぶ)代表二名。
- 三、その他、栗笠地区内在住の有志の男性。

第(入会)五条

本会の目的と賛同する者にして、会員の勧誘や有志の申し出により、本部委員会の承認により入会を得る。又脱会も同じ。

第(役員)六条

本会には次の役員を置く。

第三章 役員

- | | |
|--------|--------------|
| 運営委員長 | 一名 |
| 副運営委員長 | 二名 |
| 会計 | 正・副各一名 |
| 書記 | 正・副各一名 |
| 顧問 | 若干名(保存会々々長他) |
- 2 役員は総会でこれを選出する。

(任務)
第七 条

運営委員長は、本会を代表し、会務を統括する。

2 副運営委員長は運営委員長を補佐し、運営委員長に事故あるときは運営委員長があらかじめ指定した順序により、その職務を代行する。

3 会計は運営委員長の指示にもとづき、本会の経理並びに諸費の運用に当たる。

4 書記は本会に関する一切の記録を担当し、又、会員名簿を製作、全役員に配布すると共に、それ等の保管に当たる。

5 保存会長及び保存会、氏子代表の内各一名づつの計三名が会計を監査する。

(任期)
第八 条

役員は任期は二年とし、再任を妨げない。

(顧問)
第九 条

本会は運営委員長の推薦により、総会の議を経て顧問を推薦することが出来る。

(役割)
第十 条

第四章 委員会及び部会

本会には、次の委員会及び部会（部役員）を置く。

本部委員会（運営委員長、副運営委員長、正会計、正書記、各部長を以て構成する）

運営委員会（役員及び各正・副部長、保存会代表二名、氏子代表二名を以て構成する）

囃子方部 部長 一名 副部長 一名 以下部員

獅子舞部 部長 一名 副部長 一名 以下部員

世話人部 部長 一名 副部長 一名 以下部員

連絡部 部長 一名 副部長 一名（部長、副部長は、東・西に分かれる）

2 正・副部長は、運営委員長が任命する。但し役員との兼任は妨げない。

3 委員会、部会役員共その任期は役員任期に準ずる。

第五章 会議

(会議)
第十一 条

本部委員会、運営委員会は、必要に応じて運営委員長が招集する。

2 総会は毎年一回会計年度終了後三ヶ月以内に運営委員長が招集する。但し運営委員長または、本部委員会が必要と認めた場合には臨時に総会を招集することができる。

3 各部会は部長が必要と認めた場合、運営委員長に通達後招集する。

(重要事項)
第十二 条

次の事項は、総会に提出して、その承認を受けなければならない。

一、事業計画及び収支予算についての事項

二、事業報告及び収支決算についての事項

三、その他本部委員会において必要と認めた事項

(決議)
第十三 条

総会及び総ての会議の決議は出席者の過半数を以て決する。

(受益)
第十四条

第六章 保存会及び氏子

本会は、保存会並びに氏子より次の援助を受ける。

- 一、本会に関する政治的折衝は原則として保存会にて行う。
- 二、保存会より本会は毎年一回又は二回に分けて定まった援助費を受ける。又、必要に応じて保存会に特別援助を懇請して受ける事が出来る。

三、保存会及び氏子の代表（各々二名）を本会に加入、運営委員として、運営協議に参加を得る。猶本会と保存会・氏子との連絡はすべて、この代表がその責任に於て行う。

四、村内に於ける獅子舞の舞台に関する事項は、すべて保存会の援助を受ける。

第七章 会計

(経費)
第十五条

本会の運営に要する経費は、保存会よりの援助費、事業に伴う収支、寄附金、補助金、その他を以て支弁する。

(会計年度)
第十六条

本会の会計年度は毎年十一月一日に始まり、翌年十月三十一日に終わる。

第八章 その他

(その他)
第十七条

この会則に定めるもののほか本会の運営について必要があるときは、総会にはかつて細則を設けることが出来る。

付 則

1 会則の変更は総会の決議による。

2 この会則は昭和三十九年五月十日から施行する。

9、栗笠の獅子舞保存会規約

時代の変遷にともなうて、従来の保存会、獅子連中の在り方では、その保存に支障が多くなったので栗笠区役員・福地神社氏子役員・子ども育成会役員及び獅子舞芸能伝承者全員を中核として特に小・中学生を対象として伝承者の養成に尽力することとし、昭和五十六年十一月一日規約を制定した。

(名称)
第一章 名称、目的及び事業

第一条

本会は、栗笠の獅子舞保存会と称する。

(目的)
第二条

本会は、岐阜県重要無形文化財（栗笠の獅子舞）の顕彰と向上、かつ永く伝承するために会員協力して貢献することを目的とする。

(事業)
第三条

本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

第 四 条
(会 員)

- 2 福地神社の祭礼に獅子舞を奉納する。
- 3 獅子舞の芸の向上のため研修或は伝承のために指導する。
- 4 地区外の文化財関係との交流及び必要に応じ地区外においても奉納、披露する。
- 5 その他本会の目的を達成するために必要な事業を行う。

第 一 章 会 員

本会の会員は、栗笠地区内に在住する全世帯とする。

- 2 本会の主旨に賛同する組織

第 二 章 役 員

第 五 条
(役 員)

本会に次の役員を置く。

- 2 区役員、氏子役員、子ども育成会役員、その他主旨賛同の組織役員及び芸能伝承者全員を運営委員とする。
- 3 運営委員の内から次の役員を設ける。

保 存 会 長 一名(区長が兼務する)

同 副 会 長 若干名(構成、各組織から一名を選出する)

理 事 若干名(同 二名を選出する)

会 計 (書記) 二名(運営委員の内から選出する)

- 4 会計監査 二名(運営委員以外から選出する)

本会に理事会を設ける。理事会の構成は、次の通りとする。

保 存 会 長 一名 同 副 会 長 若干名

理 事 若干名 会 計 (書記) 二名

第 四 章 会 計

第 七 条
(経 費)

本会の運営に要する経費は、会費、寄附金及び助成金を以てこれに充当する。

- 2 必要に応じ、臨時に経費を会員から徴収することが出来る。

第 八 条
(会計年度)

本会の会計年度は、十一月一日から翌年十月三十一日までとする。

第 五 章 そ の 他

総会の議決は出席者の過半数以上の賛成を必要とする。

第 九 条
(規約の改廃)

この規約の改廃、その他運営細則等を設ける場合は、総会の決議を要する。

附 則

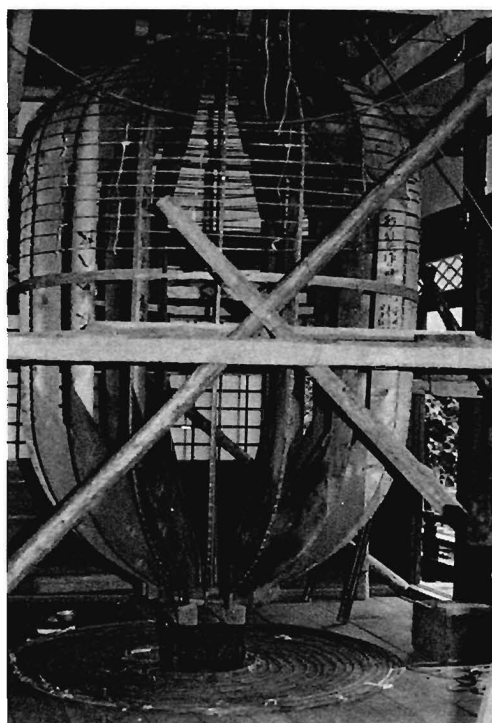
この規約は、昭和五十六年十一月一日から施行する。

以 上



昭和二十二年十月五日

敗戦後の政治的にも経済的にも思想的にも
非常な混乱期であったが、先祖から伝承され
て来た誇り高い獅子舞は是非復興せねばなら
ぬとたちあがった栗笠獅子連中の雄々しい姿
である。(戦時中、しばらく獅子舞の上演は中
断されていた。)



昭和四十九年八月
 福地神社名物大提灯の張替作業
 こんな大きな提灯の張替は、民家では行
 えないので専了寺の本堂を借り、氏子の中の
 奉仕者ですべての作業を行った。
 大きな足場が必要であり、特殊な技法のい
 る困難な作業である。

●あとかぎ

この冊子を発刊するにあたり、栗笠獅子保存会の会長はじめ役員の方がたにはひとかたならぬご支援ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

特に、本書の編集ならびに第一章栗笠村の執筆を担当された田中育次氏、第二章栗笠村の獅子舞の執筆者北垣重宗氏のご労苦に対し感謝の意を表します。

昭和五十七年三月

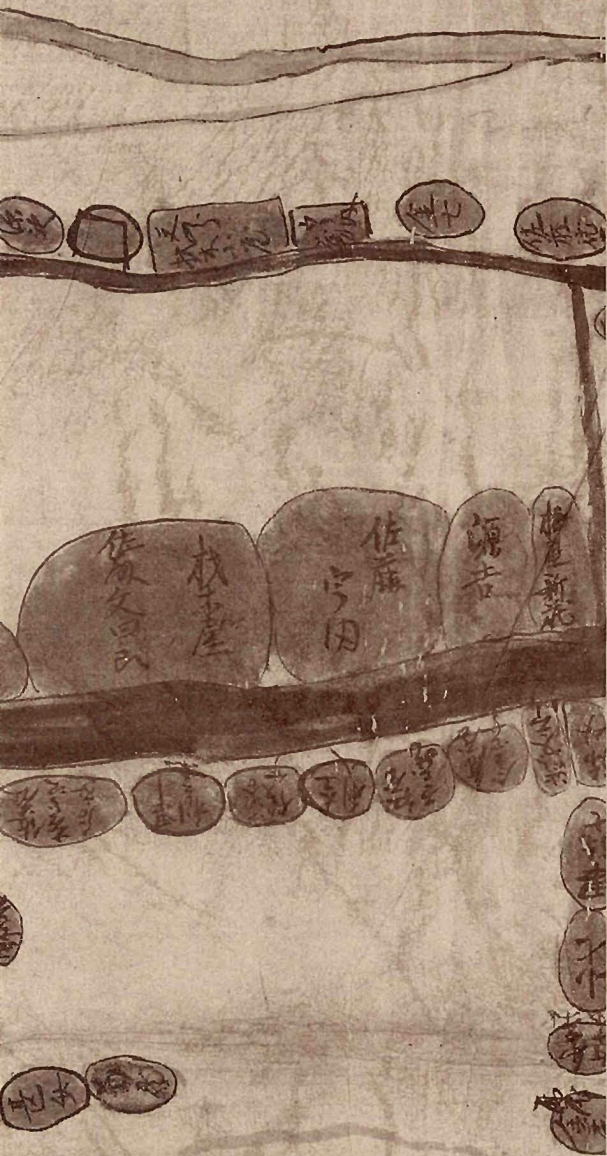
養老町教育委員会 社会教育課

養老町 栗笠の獅子舞

昭和57年 3月 発行

発行／養老町教育委員会

印刷／四橋印刷株式会社
岐阜市真砂町4丁目



七
集
卷
七

源
吉
佐
麻
字
田
佐
麻
字
田

佐
麻
字
田
佐
麻
字
田
佐
麻
字
田
佐
麻
字
田

刊
本
佐
麻
字
田